

小山内美江子

(上) そして幕があがった



そして幕があがった
(上)

小内美江子



毎日新聞社

そして幕^{まく}があがった(上)

定価 一〇〇円

昭和六十一年六月十五日 印刷
昭和六十一年六月三十日 発行

著 者 小山内美江子

編集人 川合 多喜夫

発行人 関 根 望

発行所 毎日新聞社

一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

五三〇 大阪 市北区堂島

八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷

中央精版

製本 佐久間製本

© Mieko Osanai Printed in Japan 1986

ISBN4-620-10321-7

目次

開幕ベル 5

NOTE 37

赤い靴 79

失踪 110

裁判 152

初夏 204

鏡の中 246

装帧
水田秀穗

そして幕があがつた
(上)

開幕ベル

1

汗ばむほどの熱気の中に、開演十五分前を知らせるベルが鳴った。

ベルといっても、超高層ビルの中にあるような近頃の劇場の楽屋に鳴るそれは、単なるサインに近いブザーである。

にもかかわらず、先刻から掌てのひらの中に噴き出してくる汗を、文字通りハンカチーフとともに握りしめていた川村美佐子には、駅の階段を駆け上がる時、脅迫するかのように響く最終電車の発車ベルと同じに聞こえる。

数日来の不眠がこたえているらしく、激しい動悸どうきに胸がつまった。

動悸の本当の原因は、いま、演出家から最後のダメ出しを受けている末娘の夏世にある。

その夏世を中心にしたかたちで若い出演者たちが、マシンガンのようにとび出す演出家の言葉に、いちいちうなずき、或いは叫ぶように短い返事を投げ返している。

美佐子は、邪魔にならないように楽屋の入口に背中を貼りつけて立っていたが、演出家の外国語をまじえた専門的な言葉は半分も理解できない。

ステージ・メイクアップというのだろうか、夏世のそれは、去年の春、演劇部に在学していた大学の卒業公演で見たものよりはるかに派手な色を使ってメリハリがきいている。

衣裳はキラキラと光るピンクのタイツとレオタード。

均整のとれた体型だが、それがあますところなくピッチリと見せられると、自分が産んだ子ながら、芙佐子は頬がほてってならない。

いずれにしても、自分がひどく場ちがいな所にいるのを芙佐子は自覚していた。それでいて身動きすれば、出演者たちの張りつめた雰囲気をごわすような気がして、客席に戻らなければと思いながら動くことも出来ないでいる。

ひどく喉の渇き^{かわ}を覚えたとき、恥ずかしいほど形よく突き出た夏世のバストに、演出家の指先がまるでピストルの銃口のように向けられて、それがダメ出しの最後となった。

「じゃあ、私、もう客席に行くから」

「ノド、渴いてるでしょ？」

ミネラルウォーターを瓶のままラップ飲みした夏世が、ハイと差し出した飲み残しを無意識に受け取って、芙佐子は思わず訊かずもがなのことを口にした。

「あんた、ドキドキしてないの？」

「うん」

夏世はケロッとしている。

今日の初日を迎えるため、この一週間ほど稽古場近くの友だちのアパートに泊まり込んで、顔を合わさなかったこともあるが、化粧も衣裳もちがって、芙佐子はこの娘を別の生きもののように見た。

一六七センチという大柄に、キュッと腰がくびれて、見事に張った太股の肉が膝頭に向かって締まっている。それは眩しいほどの若さだった。

春恵と、美佐子の旧い友だちである梶井邦枝を乗せたタクシーが、池袋にある六十階ビルの表にすべり込んだのは、ちょうどその頃だ。

白く磨き上げたビルの通路を抜けて、劇場にはエレベーターでのぼる。

チラッと見た腕時計は、開演十分前を指している。その目で春恵を見ると、邦枝は微かに笑って見せた。

(ちょうどね)という目だ。

ときには饒舌すぎるほど饒舌だが、必要のないときはひと言も口をきかない。そうした邦枝の性癖はとうに心得ていたし、自分の中にも似たものがあると春恵は思っている。春恵は美佐子の三人の娘の真ん中で、夏世の姉である。

母がさぞ気を揉んでいることだろう……。邦枝の微笑に応えながら、春恵は場馴れのしていない美佐子の姿を思い浮かべた。

案の定、二人が招待券を渡して劇場へ入ると、そろそろ客席に向かう観客の波に逆らうようにして、美佐子が入口の方を見て立っている。

だが、その脇に当然並んでいるはずの冬子の姿が見えない。

「冬子姉ちゃんは何？」

「下のが具合悪いって、出がけに電話が入ったの」

「具合が悪いって？」

「大したことはないらしいんだけど、風邪で熱っぽいと言うもんだから」

「ドジなんだから」

「熱があるなら仕方ないじゃないの」

邦枝が母子の会話を割って入った。

「あ、これ」

と言って、美佐子は抱いていたパンフレットをいそいで二人に渡した。

男と女が向かい合った全身像に、同じ顔の部分だけを大きくダブらせた絵は、邦枝が描いたものである。柔らかに素直な仕上がり、真紅で入れた題名の文字がくっきりと浮かんで全体を引き締めている。

劇場のロビーに来るまでに、これと同じポスターが数枚ディスプレイされているのも、昨日のうちに手配させておいた夏世への贈花の具合も配置も、すでに邦枝は素早く確かめている。

「入ろうか」

美佐子に声をかけて、邦枝は場内に向かった。

前衛劇団がよく試みるように、舞台は、かなりの客席をとり払った中央にしつらえてあった。

装置はプロレスのリングがただ一つ。客のざわめきの前に、薄暗く静まりかえっている。

本物のプロレスに見立てる趣向で、芝居はどの角度からでも観られるようになっていたが、三人の女は、全体が一番よく観られるはずだからと夏世が用意してくれた正面中央の、リングからやや離れた所に陣取った。

配役にはオーディション・システムをとったので、いわゆるスターと言われる俳優が出演していないせいか、客の入りはいま一つといったところである。

一部のスポーツ紙と芸能誌が、凄まじい稽古ぶりを取材して、“役者も体力時代”“演技か格闘か!”などと多分に興味本位な情報を流したせいもあって、変わった芝居が好きな若者たちの中に、ミュージカルに意欲を持つ中堅スターの顔などもチラホラまじっていた。

そうした顔見知りと目が合って黙礼を交わす邦枝を、美佐子は、やはり顔が広いのだなあ……と思いつながら、その中堅スターから視線を戻そうとして、思わず息をのみ込んだ。

中堅スターの二列前に、考えもしなかった男の姿を見つけたのである。

位置からして、美佐子が見たのは斜め後ろ横顔ではあったが、昔と変わらぬ耳のかたち、軽くオーラルバックに流している額のはえぎわの線。硬く、うっとうしいほど黒かった髪はほどよく白がまじって、年相応のおだやかそうな雰囲気を見せている。

美佐子が前にまわって確かめるまでもなく、男は大滝悟であった。

(あの男がなぜ此処に……!)

夏世が知らせたのだろうか? いや、あの子がそんなことをするはずがない。とすると、週刊誌で夏世たちの記事を読んで駆けつけたのか……。

開幕ベルの代わりに、徐々に灯りを落とした客席に音楽が流れ込んだが、それすらショックのあまり美佐子の耳には入らない。目に入るものは、仮設舞台の真上のライトが鮮やかに照らし出したリングマットだけだが、マットの白さが美佐子の現実感を奪い去り、あの日と同じ血の逆流を覚えて、一挙に二十年前の狂おしい思いの日々に連れ戻されていった。

(ゆうべから下の子が熱っぽい、本当にごめんさい)

出がけに電話で謝って来た長女の冬子の声(よみがえ)が甦る。そういえば、あの日も末っ子の夏世が熱っぽかった——。

(いま、君よりも、もっと多くの時間を一緒に過ごしたい女がいる)

美佐子に問い詰められて、大滝がそう答えたのはあの晩のことだった。

大滝悟は、冬子、春恵、夏世と呼ぶ三姉妹の父親であり、美佐子の夫だった男である。

もしやとは思っていたものの、真面目一方の男だっただけに、はっきりと夫の口から答えられたときの美佐子の驚愕は大きかった。

泣いて縋って翻意をうながし、子どもを楯にとっても、もはや夫の心はほかの女に激しく惹かれて
いるのを知ると、あとは、お定まりの男と女の泥沼のような諍いに堕ちて行く。そうしたどこにでも
あるような道を通って離婚届に判を押し、今は他人となっている男なのだ。

法廷で或る決着がついて以来、はじめて見かけたその男の横顔が、相変わらずの自信を持ち続けている、美佐子がそんなふうに感じたとき、美佐子たち三人の女の幕は再びあがった。

2

美佐子と邦枝と、そして和泉祐子の三人である。

(まさか、その祐子までがこの客席のどこかに……！)

一瞬、疑念が美佐子の脳裡をよぎったが、改めて大滝の隣席まで目をやる余裕は彼女からは失われている。

あの日の屈辱に震え出しそうな身体を、美佐子はただ硬くするだけだった。

むろん、邦枝は美佐子の異変に気づいている。だがそれは、善良な友人である美佐子が、夏世の晴れがましいデビューの一瞬に、母親として緊張のあまり、膝の上のハンカチーフをひたすら固く握りしめているのだろう、としか考えられなかった。

邦枝にしても、気儘な仕事ぶりと忙しきにかまけて、電話ではいつでも話してはいるが、今日、美佐子と会ったのもかれこれ一年ぶりになる。しかし、明るいオレンジ色のワンピースのせい、美佐子が前より若くなったように見えてホッとしていた。

「真面目亭主に、真面目女房！」

と昔から美佐子夫婦をからかっていたくらいだから、美佐子がこんな明るい色で身をつつんでいるのを邦枝ははじめて見た。

やはり、末娘を成人させたあとの心のゆとりと、三人の娘たちの大いなるおしやれへの助言の結果だろうと、そう考えた。

その夏世は、大学の卒業前、名のある劇団の養成所を幾つも受けては、そのすべてに落第した。一応、若い娘らしくひどく落ち込んだが、もはや親の脛はかじられない身分だと悟ったからだろう。若者たちの集まる喫茶店などでバイトをしながら、テレビ局の新人オーディションなどを、片はしからアタックして行く作戦に切り替えた。

感性はよいものを認められながら、ドラマの出演者としては、いずれもその大柄さがわざわざいして、これも片はしから不合格の連続だったのだが、今度のミュージカルでは、見事、主役の座を射止めたのである。

この大抜擢と、これから三カ月間、猛特訓を受けるのだと、昂奮して電話してきたとき、邦枝の答えはわざと冷淡なものだった。

「そんなに長いこといい気になって喚いていたら、いざ本番というとき、喉を哽らしているのが関の山」

「ううん！ 歌もだけれど、プロレスなのよ！」

「プロレス……？」

ミュージカルの題名を聞いて、邦枝は、あ、と思った。

それは、ヨーロッパの無名女流劇作家の作品で、はじめ、小さな劇団が教会の広場や酒場の前で演じていたのが次第に評判になっていくと、去年、一週間ほどバリーに滞在したとき、噂で耳にしていた。邦枝はイラストレーターとして出発し、いまは時折、誘われて舞台の装置などもやっている。数年前、懇意になった新劇女優に頼まれて手がけたその仕事で、著名な舞台美術賞を受賞したのがきっかけである。

彼女と一時期、一緒に暮らしたことのある夏世は、現代っ子らしく、都合のいいときに邦枝の名をチラッと使う。どうやら今度もそのルートで、ポスターとパンフレットの依頼が制作者から邦枝の工房^{ジョイ}に持ち込まれた。

芝居のポスターは、邦枝の好きな仕事の一つである。ちゃんと戯曲も読んだ。

女の子が、少女期を迎え、娘となり、恋をして結婚し、愛と不信に悩んだ末、自立して行こうとする女の成長を追ったものだが、感情のすべてがプロレスの技を使って表現されるのが異色である。

リングサイドも、客席通路も縦横に駆使して、物語はスピーディーに、そしてエネルギーに展開される。

庄巻は、プロポーズと、離別を決意した若い夫婦の対決の場だ。

「好きだ、ぜ！」

と叫んで、男は鋭いどきどきで恋人を倒す。夏世は本物の悲鳴をあげてリング中央に倒れ、ロープではじきとばされ、一本背負いで叩きつけられたあげく、四の字固めのまま愛の告白を受けている。そしてお返しは、

「嬉しいわ！」

と、男を頭上高々と抱え上げて振り落とす。その動きは潑刺^{はつらつ}として清潔だ。

主役も脇役も、一瞬のタイミングをはずすと決定的なダメージを受けるので、みな真剣だ。その真剣さが芝居の進行と相まって、はじけるような昂奮を生んで行く。

近頃人氣が復活したという女子プロレスには興味のなかった邦枝だったが、綿密に計算された演出のリング上のドラマと奇妙な一体感を味わって昂奮しながら、

(なるほど、このミュージカルならオーディション方式をとらない限り、そのあたりのスターは尻込みするだろう)

と思うほどの、ハートも体も激しいぶつかり合いの芝居だ。

大柄、すなわち大味^{おおじ}だと邦枝がきめつけていた夏世も、相当にハードな三カ月の特訓を受けたらしい。プロボーションも見ちがえるほどすばらしくなり、表情も小気味よく変化して、よく演^やっていた。初日の舞台は、まずまず成功だったと言えるだろう。

「ゆっくり出ようよ」

邦枝にそう声をかけられるまでもなく、美佐子はすぐに席を立つ気は起こらなかった。

エレベーターの中などで、大滝と一緒に^{おそ}なるのを恐れたからである。

歌も踊りもあったが、これがミュージカルかというほど思い切り叫んで喚いて、暴れまわった舞台の熱気に犯されたわけではない。だが、いま大滝と狭い箱の中で体を接するほど間近に顔を合わせたら、自分がどんな所業に出るのか、まったく自信が持てなかったからだ。

爽快感を満喫した観客のおしゃべりが、彼女らを置き去りにしてロビーに流れ出る頃、大滝悟は、すでに姿を消していた。

かつての妻と三人の娘が、この日、同じ空間に在るのは百も承知の上である。だが、下手に顔を合せて、再び美佐子を刺戟したくなかった。だから、花も贈らなかつたし、夏世の楽屋にも訪れるのを遠慮したのだ。

にもかかわらず、美佐子に発見されていたなどとはまったく気づかず、ビルの表を最寄りの地下鉄駅に向かい、大股で歩いていった。

ロビーからエレベーターまで続いた人いきれのせい、冷たい夜気にふれた頬が心地よい。

しなやかな獣といつていいほど躍動した夏世の見事な姿態が、まだ瞋まよたの中にはっきりと残っている。あれが、ぐずり出したらいつまでも膝の中でぐずっていた幼児だったとは、どうしてもすぐには結びつかない。

彼は、今夜の夏世がたまらなく愉快だった。

こうした芝居をあまり観ることのない大滝は、己れの血管に若々しい血を注ぎ込まれたような気分の昂揚を覚えた。ちょうど、デモに参加したあとの昂たかぶりに似ている。しかし、そういう集会にも出なくなつて久しい。

「二十二か……」

夏世の年を呟いてみて、全く脈絡もなく、その年頃の女とはついに体験を持つことのなかつた道のりを振り返っている自分にうろたえ、大滝は突然路上に立ち止まつてしまった。

3

美佐子から電話がかかったのは、邦枝がいつもよりゆっくりと風呂に入り、そろそろベッドに引き揚げようとしていたときだった。